

グローバル教育へ iEARN プロジェクト 震災子どもサミット 2005

NPO法人グローバルプロジェクト推進機構JEARN 岡本和子 kazuko@dd.ij4u.or.jp
兵庫県立川西高等学校宝塚良元校 大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程
JEARN 納谷淑恵 naya@lapis.plala.or.jp
神戸私立啓明学院 JEARN 斉藤利枝 global@keimei.ed.jp

キーワード：防災意識 ネットワーク上の学びの場 協働学習 ICT NPO と学校との連携

1. はじめに

ICT をグローバル化の到来に呼応する新しい教育に生かされないのだろうか。グローバル教育の意義を認め、その価値を信じるわれわれは、何をすればいいのか。その答えの一つが、ネットワークをつかって、学校外の教育力と効果的な連携をして、国際交流学习プロジェクトを実践し、ICTを活用した確かな学力を身につけることだと考える。

「防災世界子ども会議 2005」注 プロジェクトは、2005年に阪神・淡路大震災10周年を迎えるにあたり、インターネットなどのICTを活用し、国際的な視野の防災意識を持った子どもを育成することを最大の目的として開催する。具体的には、プロジェクトに参加する子どもたちの共同作業により子どもたちの視点から見た防災マニュアルを作成し、半年間のプロジェクトのまとめとして、阪神・淡路大震災の地兵庫県においてプロジェクト参加の国々の子どもたちの代表が集まり、成果発表と防災のあり方を議論する。本稿では、これまでの国際交流学习を超えた、新しい学びとして、本プロジェクトの取り組みを紹介する。

2. プロジェクトの背景と概要

1995年1月17日、兵庫県は予想もしなかった大地震に襲われました。多くの人々の命を奪った震災は、大人も子どもも関係なく、無差別にすべての人々に降りかかるものだということを認識させました。また、同時に災害の際に寄せられた世界からの援助は、国境を超えて助け合うことの大切さを実感しました。大震災の経験を生かして、「復興への思いが世界をつなぐ 1・17共に命の大切さを考えよう！」と題して、日本の子どもたちが、震災から復興する世界の国々の子どもたちと共に、International Education and Resource Network (以下 iEARN) アイアーンのネットワークとインターネットをつかって、今後の大震災に対する被害の軽減や復興に活かせる話し合いをもつ。そのまとめとして、2005年3月、プロジェクトに参加している国々の子どもたちが、淡路に集まり、夢舞台国際会議場を舞台に、阪神・淡路大震災10周年事業として「防災世界子ども会議 2005 in ひょうご」を開催する。

3. プロジェクトの教育的意義

これまでの国際交流学习の目的は、異文化理解にとどまることが多かった。そのため、ややもすると国際交流とは、互いの文化を紹介すればそれでよいと捉えられる節もあった。本プロジェクトでは、そのような異文化理解の枠に

とどまらず、災害の際には、どうすれば自分たちの命を守り、互いに助け合えるのかを考え、学びあうことを目的とし、異文化の人々と深い絆でむすばれることを通して、社会の一員として自覚し、地球市民としての意識を持つことを目指している。

4. 本プロジェクトにおける学習観

本プロジェクトは正統的周辺参加という見地から学習を捉えている。状況に埋め込まれた学習の著者、ジーン・レイブラは、子どもたちの学びを社会的共同参加という状況の中で考える必要があるとし、協働的な学習の中で現れるものとしている。本プロジェクトにおいても、参加生徒は教師や、他の国の生徒などとの共同の作業を通し、そこでのアイデンティティ形成を通して学んでいく。このように学習を捉えるとき、そのような学びがおこる場を形成することが重要となる。

5. ネットワーク上の学びの場

本プロジェクトは、ネットワーク上に「学習の共同体」を形成して、活動を進めていく。

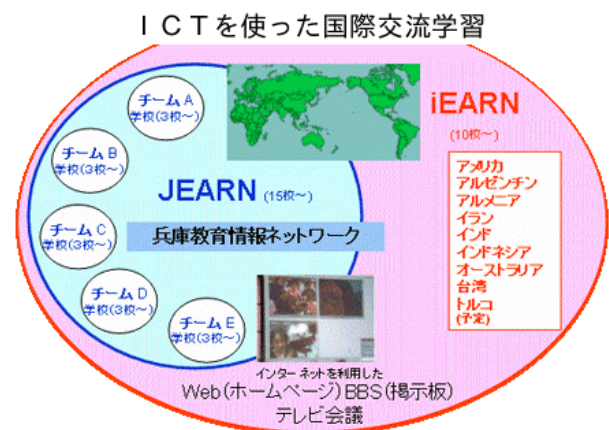


図1. ネットワーク図

プロジェクト参加者は、iEARNの国際的な教育ネットワークにより世界から募り、国内の参加者については、iEARNの日本センターであるJEARNがおこなう。

生徒は、ネットワーク上のセキュリティのかかったフォーラムでの話し合いをもち、そこでのプロジェクト進行状況は、定期的にウェブで紹介される。フォーラムにおいて生徒の自由な発言を保障しつつ、ウェブでの発表により社会からのフィードバックを得る形で進む。また、大学生の

ボランティアが、必要に応じて、生徒の活動をサポートする予定である。地震に関連する専門的な知識が必要なことに関しては、専門機関によるサポートが得られる仕組みとなっている。

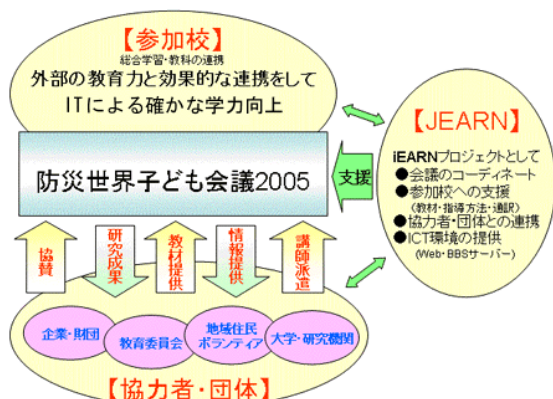


図2．全体図

現時点では、9月から始まるプロジェクトの準備として、日本、イラン、アルメニア、台湾、アメリカの教師および専門家の中で打合せがおこなわれている。また、プロジェクトを支援するボランティアも組織化されつつある。

地震のときの様子を思い出しました。今まで一生懸命生きてきた人の命を一瞬で奪ってしまったものが地震だと思いました。また給水についても水のありがたさ、いつでも手に入れるのが当たり前になっているけど、当たり前じゃないということを思い知りました。今までいるんな人が一生懸命つくってきた街を一瞬のうちに壊してしまうなんて。

人と防災未来センターを見学して、地震は、すごい怖いものだと思ひにしてみました。もっと地震のことを知って、これから起こる地震についての対象を自分でもわかって、そしてみんなに、(世界中の人にも)伝えて行きたいです。

ここまで悲惨な状態の中、よく家族全体が生きていたなと思ひ、被害にあわれた方の悲しさがわかった気がした。また人々の優しさを見て感動した。元気な人が自発的に人を助けるという美しさを感じました。

被害にあった人が、頑張って生きて行こうと思ひようになったのが、遠方からや、近隣のボランティアの人が来て、いろいろな手助けをしてくれたこと。このボランティアの中には、たくさんの子どもたちが参加したそうです。

表1．阪神・淡路大震災を経験した参加予定校の子どもたちの事前学習における感想文

6．まとめ

本プロジェクトは、既存の iEARN プロジェクトの成果 [1][2] や 2003 年に日本で開催された世界大会 [3] との連続性の中にあり、内容・形式の 2 重の意味をもって学びの

実践共同体 [4] の再生産装置として機能するようデザインされている。

参加者はいずれも、何らかの形で震災を経験した子どもたちである。プロジェクトは自らの震災経験を語りながら始まる (表 1)。誰にでも等しく襲いかかる圧倒的な自然の力の前で、個々の人間の無力さを認識するという共通体験から、国境を越えての一体感、さらに救助・復興における助け合いの大切さを再認識する。そして互いの経験や意見を出し合いながら、将来の被災者 (地震そのものの被害からは免れ得ない!) のためのマニュアル作成を通じて、支援される側から支援する側へと自然に意識を変化させることになる。

一般的な教室での学習形式から、教師の手招きに従って、学生ボランティアや翻訳ボランティア、コーディネータの手厚い支援を受けながら、次第に世界各国の参加者と交わるようになる。また、プロジェクトの集大成ともなる国際会議の場では、各国からの参加者に加え、プロジェクト全般を通じて支援を受けた学生ボランティアや翻訳ボランティア、コーディネータとも一同に会することで、自分も将来、子どもたちの学びを支援したいという意識が芽生える。

このように、教室の中だけで完結する従来の「～について学ぶ」というスタイルから、「～の中で学ぶ」というスタイルへの、無理のない移行プロセスを提供するのが、JEARN である。現在 JEARN では、その前身とも言えるテレクラスでかつて学んだ子どもたちが、様々な形でプロジェクトを支援している。

「防災世界子ども会議 2005」URL :

<http://www.jearn.jp/japan/earthquakeYS2005/index.html>

参考文献 :

[1] 納谷淑恵・増田恵理香・岡本和子・上野浩司 2003「国際交流学習の実践を通して見た iEARN 国際会議 日本とロシアとのディベアプロジェクト交流から」日本教育工学協会、『2003 年沖縄大会研究発表論文アブストラクト集』, p27

[2] 岡崎あかね・岡本和子・長田寿和子 2003「ロシアより愛を込めて～絵による国際交流～」JEARN、『Proceedings of 10th International Education & Resource Network Annual Conference & 7th Youth Summit』, p173

[3] 2003 iEARN 国際会議報告書
<http://www2.jearn.jp/fs/216/report/index.htm>

[4] Lave & Wenger 1991 (邦訳 1993)

『状況に埋め込まれた学習正統的周辺参加』 産業図書

註：プロジェクト名を震災子どもサミット 2005 から防災世界子ども会議 2005 と変更する。